

郷土の音楽の指導方法についての一考察

～和歌山県民謡「串本節」の実践をとおして～

内垣 美佳

本研究は、和歌山県民謡「串本節」を教材とし、学校行事との関連を図った題材構成や、体全体で民謡の特性を感じ取る表現活動を取り入れた授業実践を行い、郷土の音楽に愛着をもち、多くの人々に郷土の音楽を伝えようと、曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌ったり合奏したりする子どもの姿をめざした。「体全体で民謡の特性を感じ取る表現活動」の一環として、和太鼓や踊りの指導者を地域から招き、和楽器に触れたり、音楽に合わせて踊ったりする機会をつくり、民謡の魅力を味わえるようにした。その結果、聴き手を意識した表現の工夫をしようとする主体的・協働的に音楽活動に取り組む子どもの姿が見られ、さらに、子どもへの質問紙調査からは、歌うだけでなく、踊ったり器楽合奏をしたりしたことで「串本節」への愛着が高まり、民謡を演奏する楽しさを見出せたことが明らかになった。

キーワード：郷土の音楽、串本節、民謡、器楽合奏

1. 研究の目的

本研究の目的は、郷土の音楽に愛着をもち、多くの人々に郷土の音楽のよさを伝えようと、思いや意図をもって表現する子どもを育てるための音楽の指導方法を探ることである。

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）の指導計画の作成と内容の取扱いの項において、「我が国や郷土の音楽の指導に当たっては、そのよさなどを感じ取って表現したり鑑賞したりできるよう、音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」と新たに示され、我が国や郷土の音楽の指導方法の工夫がますます求められている。和歌山県民謡「串本節」は全国的に有名な民謡であるにも関わらず、和歌山県の中においては、教材として音楽の授業でほとんど扱われていないのが現状である。本研究では、表現及び鑑賞の活動の中で、「串本節」を教材化する意義を見出しながら、学校行事との関連を図った題材構成や、体全体で民謡の特性を感じ取る表現活動を取り入れた授業実践をとおして、郷土の音楽の指導方法について探っていく。

2. 研究仮説

郷土の音楽に愛着をもち、多くの人々に郷土の音楽のよさを伝えようと思いや意図をもって表現する子どもを育てるためには、次の2要件が効果的であろう。

- ①鑑賞、歌唱、器楽、学校行事を関連付けた題材構成
- ②民謡の特性を生かした指導の工夫
 - ・五線譜を使用しない歌唱指導
 - ・ゲストティーチャーとの連携

3. 研究の方法

「串本節」を教材にするにあたって、子どもたちに愛着をもたせられるかどうか重要であると考えた。

「串本節」を知っているかどうか、6年生3学級（29人、30人、29人）で尋ねたところ、「知っている」と挙手したのは、各学級2、3人程度であった。そこで、民謡に親しむ態度を身に付け、さらに、「串本節」の特徴にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって表現する子どもを育てることをめざして、次の3つの研究方法を考えた。また、実践を進める中で質問紙調査を行い、「串本節」にどれだけ愛着をもっているか分析する。

3. 1. 鑑賞、歌唱、器楽、学校行事を関連付けた題材構成

「串本節」の特徴の一つに、歌に踊りが付けられているということが挙げられる。今回、6年生の担任からの提案もあり、運動会の組体操に「串本節」の踊りを取り入れる。音楽の第一次鑑賞、第二次歌唱の活動後、学年の担任、ゲストティーチャーと連携を図って、踊りに取り組み、「串本節」に親しむ態度を身に付ける。

また、自分たちの「串本節」の演奏（歌唱・器楽）を聴き手に伝える場をつくることで、曲の特徴にふさわしい表現を工夫する力、音を合わせて演奏する技能、そして、子どもの達成感や充実感を高めることができるのではないかと考え、音楽に関係する学校行事をカリキュラムの中に積極的に取り入れることにした。具体的な行事は次のとおりである。本校の研究発表会（2018/10/27）、平成30年度全日本音楽教育研究会全国大会〔和歌山大会〕（2018/11/9）、本校の秋祭り

(2018/11/11), 和歌山市小学校音楽研究演奏大会
(2018/12/7)

学校行事で発表した演奏を録音し、振り返りの時間をつくる。聴き手には自分たちの演奏がどのように聴こえているのか、自分たちの思いや意図が伝わる演奏になっているかという視点をもって、自分たちの演奏を客観的に聴く。表現の工夫について考え、思いや意図を確かめ合いながら表現を創り上げていく。

3. 2. 民謡の特性を生かした指導方法の工夫 ～和歌山県民謡「串本節」を例に～

3. 2. 1. 五線譜を使用しない歌唱指導

リズムや強弱を分析してから歌唱の活動を進めるのではなく、民謡は主に口承されてきたということを生かし、範唱を何度も聴いて真似る活動を行う。真似ることで民謡の音楽的な特性を体で感じ取りながら歌えるようにする。(今回は串本節保存会が歌う「串本節」の音源を範唱とする)五線譜は使用せずに、歌詞だけを書いたワークシートを配布し、のぼして歌っているところや息継ぎの位置など、音源から聴き取った気付きを記入させる。楽器による伴奏は入れずに、手拍子を打ちながら歌い、より民謡に親しめるようにする。

3. 2. 2. プロの演奏鑑賞やゲストティーチャーとの連携

和楽器を取り入れた器楽合奏をするにあたって、動機付けとして、プロの和太鼓の生演奏(芸能楽団舞太鼓あすか組)を鑑賞する。和太鼓の種類や、音色の特徴、演奏方法を体で感じながら学ぶ機会にする。また、地域の和太鼓の指導者である黒潮躍虎太鼓保存会の宇治田良一先生をゲストティーチャーとして招く。構え方や打ち方など、具体的に教えてもらい、音色や響きに気を付けて演奏する技能を身に付けさせる。

踊りのゲストティーチャーとして、りら創造芸術高等専修学校の天翔りいら氏を招き、昔から伝わる歌に新たな振りを付けてもらう。拍に合わせて歌う民謡であることを体全体で感じ取ったり、「串本節」への愛着が高まったりすることを期待する。

4. 授業の実際

ここでは、平成30年度に行った題材『郷土の音楽に親しもう～「串本節」の魅力を伝えよう～』(6年生)の実践について報告する。

4. 1. 題材設定の理由

本題材では、まず、プロの和太鼓演奏会を鑑賞し、次に、「串本節」を教材とした鑑賞の活動をととして民

謡のよさや面白さを感じ取らせ、民謡特有の声の音色や節回し等の音楽の構造との関わりについて気付かせる。

第二次では、鑑賞の活動での学びを生かしながら、歌唱の活動を展開する。仲間と声を合わせて民謡を歌う楽しさを味わわせたいと考え、6人のグループ活動を取り入れ、範唱を繰り返し聴かせながら真似て歌わせる。歌い方を工夫させたり、息の使い方を意識させたりしながら、曲想に合った自然な歌い方で歌える力を身に付けさせる。鑑賞と歌唱の活動の後、踊りのゲストティーチャーを招き、運動会との関連を図る。

第三次では、器楽の活動をととして、和楽器の音色と他の楽器との音のバランスや、全体の響きに気を付けながら、曲の特徴にふさわしい表現を工夫できるようにする。また、「串本節」の主旋律を引き立たせる音量のバランスなどについても考えさせる。和太鼓の奏法については、ゲストティーチャーを招いて教えてもらう。また、まとめとして、昔から伝わる曲調の歌唱、そして、その歌唱に合わせた踊り、器楽合奏をつなぎあわせ、学校行事で演奏を披露する。学校行事の中で発表を重ねることで、思いや意図に合った演奏の仕方ができているかどうかを見直ししながら表現を工夫する力を育てる。

題材の目標は、「民謡のよさや面白さを感じ取りながら、曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、どのように演奏するかについての思いや意図をもち、協働して音楽活動をする楽しさを味わうことができる」とした。

4. 2. 和歌山県民謡「串本節」について

本州最南端の町、和歌山県串本町で生まれた民謡である。江戸時代末期、「エジャナイカエジャナイカオチャヤレ」とはやして、祭礼の神輿行列唄として歌われていたことから「オチャヤレ節」「エジャナイカ節」とも呼ばれ、後に、三味線に合わせたお座敷唄になったと伝えられている。拍ののったリズムで歌われ、女踊り、男踊りの振り付けがある。

今回、本研究を進めるにあたって、いくつか楽譜を集めた。串本町観光協会からの資料には、昭和39年4月に須賀清氏ら3名が歌う正調「串本節」を当時、串本高等学校の西野政和教諭が採譜した楽譜が残されている。採譜された楽譜を見比べると、ほとんどリズムは同じであるが、節回しやこぶしを入れて歌う箇所が所々で異なることが分かり、口承して伝わってきたことがうかがえる。また、伴奏に三味線、笛、太鼓が使われていたことが分かった。

歌は、18番ぐらいまであったようだが、お座敷唄であるため、恋模様を歌ったような歌詞もあり、授業ではその中から教材としてふさわしいものを3つ取り出し、1番・2番・3番として扱うことにした。

器楽用の楽譜はほとんど存在しないようで、今回手

に入れることができた大柿かおる氏によって編曲された楽譜を器楽用として扱う。4分の2拍子で♩=92と楽譜に記されており、原曲よりも速い。主な旋律をリコーダーや鍵盤ハーモニカが担当し、アコーディオン、キーボード、木琴、鉄琴などが主な旋律と副次的な旋律を行き来する。低音パートは低音オルガンとバスアコーディオン、リズムパートは和太鼓、すりがね、チャップパである。

＜主に使用した教材等＞

- ・鑑賞音源：「串本節」の演奏（民謡クルセイダーズ、見砂直照と東京キューバン・ボーイズ、宝塚歌劇団・明日海りお、串本節保存会）
- ・器楽用楽譜：大柿かおる編曲（全音楽譜出版社）

4. 3. 学習展開の実際

4. 3. 1. 民謡特有の歌い方を感じ取って声を合わせて歌おう（第二次【歌唱】）

第一次の鑑賞の活動で様々な表現形態の「串本節」を聴き比べる活動を行った後、実際に仲間と共に声を合わせて歌う活動を展開した。まず、民謡の歌い方の特徴を感じ取らせるために、串本節保存会が歌う音源と合唱版に編曲された音源を聴き比べ、節回しや声の音色の違いなどに気付かせた。次に、今回は、昔から伝わる歌い方で歌うことを確認し、歌う時のポイントを2点示した。1点目は声の出し方、2点目は息継ぎの箇所である。歌詞のみを書いたワークシートを配布し、息継ぎをしている箇所を聴き取らせ、ブレス記号を記入させた。

次に、6人のグループに分かれ、CDの範唱を真似て歌い、最終はCD無しで歌えるようになることをめあてとした。子どもたちが主体的に活動を進めていけるようにグループごとにCDデッキやiPadを用意し、すぐにその場で範唱（串本節保存会の音源）を聴いたり、自分たちの声を録音したりすることができるようにした。

はじめは、どのグループも恥ずかしがり、なかなか声が出なかった。1つの支援の方法として、声が出ているグループと声が出ていないグループを合体させて、一緒に歌うように促した。すると、10人以上で円になり、地声でのびのびとした声で楽しそうに何度も歌う子どもの姿が見られた。「エジャナイカ」「ハア オチャヤレ」の囃子言葉は声を変えて歌う子どももいた。

第一次（鑑賞）と第二次（歌唱）の授業後に「串本節」のお気に入り度を調査した。第一次後は、『「串本節」は好きですか』という問いに「はい・いいえ」で答える形を取った。（表1）しかし、答えにくい様子であったので、第二次後はお気に入り度を星3つで答える形にした。（表2）

表1 「串本節」お気に入り度 第一次鑑賞後 6年B組30名

好き	いいえ	分らない
12人	12人	6人

表2 「串本節」お気に入り度 第二次歌唱後 6年B組30名

星0	星1	星2	星3
1人	5人	12人	12人

（星の数はお気に入り度の高さを表している）

4. 3. 2. ゲストティーチャーに踊りを教えてもらおう（運動会との関連付け）（特別活動）

運動会の組体操に「串本節」を取り入れ、学年全体（96人）で踊ることにした。天翔いらい氏に、「串本節」に振りをつけてもらい、体育館や運動場で教えてもらった。天翔氏の指導はとてもテンポよく進み、子どもたちは必死に短い時間で振りを覚えようとした。教えてもらっている途中、「こんなにかっこいい踊りと思わなかったなあ」という声が出た。自分たちが想像していた振りとは違い、新鮮だったようである。また、音楽会等の音楽関係の学校行事でも「運動会で踊った振りを踊りたい」と希望する子どもを募集したところ、96人中29人が希望し、残りの67人が歌う「串本節」に合わせて手ぬぐいを持って踊った。

4. 3. 3. 自分たちの演奏を振り返りながら、思いや意図に合った演奏の仕方を工夫しよう（第三次【器楽】＋音楽関係の学校行事）

第三次では、6年生全体96人で器楽合奏に取り組んだ。各学級の音楽の授業でパート練習や個人練習を重ね、何度か学年で合わせた。初めて「串本節」の合奏を発表したのは、本校の研究発表会の日（2018/10/27）である。次の授業記録は、体育館で自分たちが発表した演奏の録音を、音楽の授業で聴いた時のものである。

教師：次は、課題についてどうですか。
 かと：全体的に速かったからもう少しリズムを考えてゆっくりしたい。
 ひかる：和太鼓の音が全体的に強い。
 そうし：最後のミソラドレミがきこえない。
 あみ：アコーディオンは、Eのはじめが弱くてFからイントロに戻る所が速くてずれていた。
 きよ：みんな2回目のイントロに戻る所が合っていない。
 はるや：Fの所の和太鼓の音が大きくて他の音を消してる。
 （中略）
 教師：だんだん強弱は意識できるようになってきたよ。一番の課題はどこかな？
 子ども：EとFのところ！

そして、最後の4回目の発表の場であった和歌山市小学校音楽研究演奏大会（2018/12/7）の演奏後も自分たちの演奏の録音を聴いて振り返りを行った。ワークシートを配布し、「よかった所」（3つ以上）と「ここはちょっと残念な所」（1つ）を書かせた。聴く観点を、テンポについて・音のバランス・演奏技術・強弱・全体の構成・その他（自分の担当楽器）の6点とし、楽譜を見ながら具体的に書くように言及した。（図1）星3つで表す「串本節」のお気に入り度も再度調査した。（表3）

①よかったところ

- ・全体的にテンポが速くなってなくてよかった。
- ・F からイントロに戻る時のみんなのタイミングがぴったりとそろっていた。
- ・最後のCoda の所で終わるタイミングがそろっていた。
- ・今までで一番まとまった演奏だった。
- ・それぞれの音が今までよりもよく聴こえた。
- ・主旋律とかざりの旋律の重なりがきれい。
- ・Dの所でまったりと波に乗っている感じがした。

②ちょっと残念だったところ

- ・リコーダーとアコーディオンが聞こえにくい。
- ・Fの所が、木琴や鉄琴パートのメロディがすごく出ていて、主な旋律が全然出ていない。
- ・メロディよりベースの方が大きくてメロディがきこえにくい所があった。

図1ワークシートへの記入例

表3 「串本節」お気に入り度 第三次器楽後 6年B組30名

星0	星1	星2	星3
0人	0人	5人	25人

5. 授業の考察

5. 1. 学校行事を取り入れた題材構成について

- ①運動会だけでなく、音楽会でも自ら希望して踊る子どもの姿から、「串本節」に愛着をもたせるためのアプローチとして、運動会との関連付けは効果があったのではないかと考えられる。また、音楽会ではアカペラで歌を歌った。伴奏や手拍子がなくても声をそろえて歌えたのは、拍に合う曲の特徴を体全体で感じ取った踊りの経験が影響しているのではないかと考える。
- ②学校行事で発表した自分たちの演奏を振り返る活動を行うことで、子どもたちが主体的・協働的に課題を見つけ、表現の工夫をすることができた。また、図1にもあるように、課題ばかりではなく、演奏を重ねるにつれて、自分たちの演奏が思いや意図にふさわしい音になってきた喜びや充実感を感じていることが分かる。

5. 2. 民謡の特性を生かした指導の工夫について

- ①第三次の器楽で和太鼓を希望した子どもの大半が、プロの和太鼓演奏を聴いた後、「一度和太鼓をやってみたい」と感想を書いていた。プロの演奏に刺激を受けたことが分かる。また、ゲストティーチャーに和太鼓の奏法について教わったことで、演奏する姿勢や音色が格段によくなった。
- ②少人数では声が出にくく、人数が増えると楽しく手拍子をしながら大きな声で歌う子どもの姿が見られたのは、曲の特徴が大きく関係していると考えられる。関係していると考えられる曲の特徴は、大勢で歌う酒盛り唄として全国的に広まった歴史をもっていること、拍に合った曲であること、1番の曲の長さが短く同じ旋律を繰り返すこと等である。また、歌唱後に『「串本節」のよさや魅力』について書かせたところ、「地声だから歌いやすい」「エジャナイカやオチャヤレの所で盛り上がる」などの意見が書かれてあった。民謡の特徴である地声で歌うことや、囃子言葉などの面白さも感じたようであった。

6. 成果と課題

6. 1. 成果

表2と表3の結果から鑑賞と歌唱だけでなく、器楽の活動に取り組んだことで「串本節」への愛着が高まったことが分かる。他の学級でもお気に入り度が高くなる結果となった。授業の中で「愛着」という言葉は使わなかったが、子どもたちの最後の感想には『「串本節」に愛着をもった』という意見がいくつも見られた。本研究をとおして、郷土の音楽に愛着をもち、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって表現する力を育むためには、鑑賞・歌唱だけでなく、器楽や学校行事との関連付けが効果を得た。また、知識を先に与えるのではなく、実際に範唱を聴いて真似たり、踊ったりする表現活動が、民謡に親しみ、民謡の特徴を感じ取らせることにつながった。

6. 2. 課題

範唱を真似ることで、子どもが歌いやすい音域よりも少し低い音域で歌うことになってしまった。郷土の音楽を教材化するにあたって、子どもが自然で無理のない歌い方で歌える音域や、ふさわしい伴奏の仕方についても探っていきたい。

参考文献

- ・公益財団法人音楽鑑賞振興財団/編集・発行（2010）「音楽鑑賞教育 季刊 Vol.2 我が国や郷土の伝統音楽の指導」
- ・公益財団法人音楽鑑賞振興財団/編集・発行（2016）「音楽鑑賞教育 季刊 Vol.26 郷土の音楽に愛着をもつ」
- ・田村学（2018）「深い学び」東洋館出版社
- ・小学校学習指導要領音楽編（平成29年告示）東洋館出版社